慧超往五天竺國傳逐錄

義淨と悟空との中間時代に於ける西域事情の研究に於て、敦煌出土の慧超の往五天竺國傳が貴重なる史料なることは既に屢々論述せられたことであり、從つて其印出も亦た屢々行はれた。即ち（一）羅振玉氏が宣統元年敦煌石室遺書中に先づ之を收め、札記を附して刊行して以來、翌年には（二）藤田博士が之に據つて慧超傳箋釋を著はして、本文と共に詳密なる註釋を公けにし、更に（三）翌年之を改版補訂し、次いで（四）大正十五年余とペリオ氏との共編として發刊した敦煌遺書中に始めて原本の寫眞版を載せ、（五）昭和二年大正藏經が之に據りて其の本文を收錄し、（六）昭和六年大日本佛教全書は其の遊方傳叢書第壹に藤田博士の慧超傳箋釋と其の上に幾條かの高楠博士の考訂を加へたものとを收めて刊出した。下に記すフックス（Walter Fuchs）博士の書に據ると、支那に於ても（七）民國二十年（一九三一）に錢稻孫教授に依つて又之が印行せられたとのことであるが、尙ほ寓目の機會を得ない。此等諸種の刊行の中余が其の寫眞版を印行した以前のもの、即ち（一）（二）（三）は羅氏が筆生をして原本を謄寫せしめたもの、若しくはそれが印出せられたものに據つたのであつて、初めの抄寫に存した多くの魯魚の誤は其の儘に傳へられたのである。（五）（六）は（四）の影印本を參照したのであり、（七）は直接印本の利用には及ばなかつたやうであるが、フックス博士の言ふ所に據ると（五）を參照してあるとのことであるから、或る程